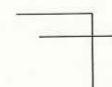
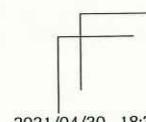
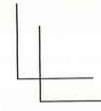
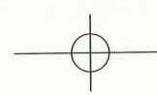


①



13 Q ラナテ [□□] その曲しか吹けない (ふじいは)
13 Q ラナテ [□□] The Only Tune That He Could Play (ふじいは)

山形浩生訳 [□□] 13
(ふじいは) 3字上



227 その曲しか吹けない

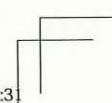
5
下

111

第1回

トム・ハーフシェルはラップ演奏が主専攻で、郷愁民間伝承が副専攻、付録課外科目は怪獣変身でございました。父親はこう申します。「我が息子トムや、それではバランスが完璧ではないな。選択がソフトすぎる。ソフト芸術、ソフト科学、ソフトなインチキ対照課目。息子や、学問にもっとハードでもっと男らしい要素を取り入れにやならんぞ」そこでトムはハード地理学を主要課外科目として取つたのです。これで基本課程に加えて四分野の勉強が必要となり、これは賢い若者であつてもかなりきついスケジュールです。そして、そこがトムの泣き所でもあつて、かれはあまり賢くなかったのでした。直観力はあり、リズム感もあり、活気にあふれ、熱意に満ち、音感も趣味もいい若者ではありますし

"コラ
◎ Goliath
(P.3416. レフア)



た。でも、とにかく賢くはなかつたのです。
それでも、年長者たちや同世代の人びとには人氣がありました。そして友情の固い紳は
どんな講義でも切り抜ける役にたつもの。

トムと友人三人、コブ・ヨリアス、デューカーク・チャールズ、ライオン・ブライトフット
は、みんな男らしい若者で、ある春の朝にラバにまたがり槍で荒っぽい雄ブタを狩りつつ、
トムの短所や長所や、世界の様々な喜びについて語り合つておりました。

「おまえは相手のいない半分だな、トム」とコブ・ヨリアスは、きわめてやっかいで足の
乱れた雄ブタを追い、疾走するラバをUターンさせながら叫びます。「そしてオレたちの
世界は、相手のいる完成体だらけの世界なんだ。自らを完成させろ、トム、完成させるん
だ！」

人類最良の友たるブタにかかる仕事は何であれ立派な職業ですし、槍でブタを殺すの
はことさら楽しいもの。ブタは肉も皮も与えてくれます。さらに凶暴さも楽しみも友情も。
ブタの血を流すのは、自分自身の血を流すにも匹敵しそうなほど途方もないことなのです。
「自分を完成させるって、まさにオレがやろうとしてることなんだ」とトムは難しい角度
から、まったくもつて完璧な槍投げでその雄ブタを殺しつつわめき、そのままその獣の死
体を通り越しました。そして他の若者たちは、感心してため息をつくのでした。

トム・ハーフシェルはそうした他の若者たちほど身体が大きくもないし強くもございま
せん。タフな知性もないし一心に打ち込む頑固さも、手先の器用さも持ち合わせてはおり
ませんでした。だがそれでも、他のだれよりも見事な殺しをたくさんやつてのけましたし、
槍の扱いの見事さやラバの扱いとブタ解体は実に堂に入つたものです。雄ブタの槍狩猟で
重要なはずのあらゆる要素において、四人の中で最低だったのに、それでも仕留める数は
トムが最高でしたし、しかもその仕留め方も他より目の覚めるようなものだったのです。
トムが持っていたのは巧妙さで、これはあまり理解されていない性質なのでした。

「相手のいないハーフシェル（一枚貝）のトム」とデューカーク・チャールズは、どう猛で剛
毛まみれのブタどもを追う攻撃に乗りだしつつ歌いました。若者四人はブタ九頭をすでに
殺し、この朝は残り三頭を殺す予定だったのです。「ハーフシェル・トム、いつもどこか
におまえの残り半身がいるようなんだがな。命名の回転盤を回したとき、おまえの名前に
ちょうどびったりのところで止まつたよ。おまえはいろんなことを実にうまくこなすのに、
それでも完全じゃない。どうしてだろうな？」不完全なものはオムハカ要素がある。他
のみんなは完全だ。そのブタ野郎に気をつけろ！」

そのブタ野郎は、頑丈な牙を生やした雄ブタで、トムのラバの足に切りつけてなぎ倒し
ました。そしてさつきより短距離でUターンすると、投げ落とされて足下もまだおぼつか

ないトムめがけて突進してまいります。トムは槍の刃を使うにはすでに接近しすぎていたので、槍の握りを使って雄ブタの突進を二度かわしました。そして雄ブタはトムを捕らえ——でもそのときにはライオン・ライトフットがその雄ブタを捕らえておりました。ライオンのラバは、自分の仕事を楽しんでいた騒々しい出来損ないでしたが、長い一撃で「上からの殺し」の体勢がすばり取れるような位置にまでライオンを運び、かれはそこからえぐるような、ほぼバックハンドの刃づかいで雄ブタを仕留めたのでござります。

ブタ野郎十頭を仕留めました。あと二頭。そして動搖はしても才能あるトム・ハーフシエルは、再びラバにまたがって新しい攻撃に乗り出します。

若者四人の間の友情は固く、お互いのためににはみんな、命も手足も何度となく危険にさらしたものでした。みんなの狩り場は小さな屠畜場裏のブタ廻いの中でしかなかったし、興奮して戦い疲れたブタを屠畜する方法としてはまちがいなく、もっと簡単で安全なやり方があるはずではございます。でもブタはめざましいやり方で屠畜されるべきなのです。ブタがらみのあらゆること、このトーテム動物関連のすべては、可能な限りめざましい形で行われるべきなのですから。

さて、残ったブタ野郎どもの中には、怒り狂った足の速い雌ブタがいて、こいつはとて

つもなく危険でした。雌ブタどもの間には憎悪と直観の要素がございます。ブタは人類最良の友ですが、これはこの動物の中の消えゆく雌ブタどもには当てはまりません。雌ブタどもはどういうわけか（というのも、こいつらの目の前では決して明言されないことなどではつきりとは知りようがないはずですから）残った自分たちですらいずれはクローンの雄ブタどもに置きかえられてしまふことを感じていたのです。

この足の速い雌ブタは、牙が短くて内側にしつかり寄っておりました。殺し屋、それも厄介で突進する殺し屋だったのでございます。

「こいつらどう猛で以前の世界からの残留動物は、人間にいさきかも喰えようがないことを万物に感謝しようじやないか」とヨリアスがよびかけます。「こんな野蛮な代物が自分たちの種の中にいるくらいなら、みんな死んだ方がマシだ。気をつけろライオン！ 気をつけろトム！」若者たちとしては、十一頭目と十二頭目の獲物はもつと手のかからないブタどもの中から見つけたかったところですが、この悲鳴と金切り声を上げる雌ブタが突進してきたので、これを殺すしかなくなってしまった。その突進があまりに素早かつたので、蹄の割れたラバどもはまったく対処のしようがなく、コブ・ヨリアスとデューカ・チャールズのラバがなぎ倒されてしまいました。

しかしそこでその雌ブタを殺したのは、自分も手負いのラバにまたがった血まみれのト

ムだつたのでした。しかもその巧妙さと奇妙な欲望のすごさときたら。他の三人は、こうした生き残りの雌ブタどもはなるべく相手にしたがりませんでした。でもトム・ハーフシエルはそいつらがことさらお気に入りだったのです。トムはわくわくする荒っぽい殺戮で雌ブタを仕留めました。その仕事が終わつたとき、トムの槍には肉の巨大な塊がついておりましたので、トムは一瞬そこからペットのブタを作ろうかと思ついたほどです。

でもそれがいかに馬鹿げた発想か思い当たりました。ブタをクローンする材料は、雄ブタの肉のかけらだけなのです。それにトムはすでにかわいいペットのブタを一頭持つておりました。次の一頭を請求するのは、そいつがペットとしては大きくなりすぎるまで待とうというのがトムの腹つもりでございます。

そのときライオン・ブライトフットが、いささか盛り上がりに欠ける形で十二頭目のブタ野郎を仕留めたのでした。

ああこの若者たちがやらねばならない仕事は、すべて文句なしにつらく暑く血まみれの仕事ではございます。でもそれに榮光を感じられないようでは、人類の若者とは申せますまい。一同は死んだブタ野郎どもをラバの尻尾のところにある三脚にまで引きずり、そしてその一頭目をすばやく吊します。そして独自のブタ皮剥ぎの歌にあわせて皮を剥ぐのでした。若さ、若さ、それは危険と死を、実に簡単な作業にすら持ち込んだがるものなので

す！ これぞ充実感。これぞ完全性！

でもトム・ハーフシエルだけはちがいました。そしてみんないつも、トムがどういうわけか不完全だと冗談口をたたき合つておりました。でもその日はいつになく重要なことが起きようとしていたのです。

「オレたち、今晚の『最後の人』祭りに参加できるなんてツイてるぜ」と皮剥ぎナイフとやつとこを強い手で使いつつ、ライオン・ブライトフットが叫びました。「最後の人間」は祭りはこれまであったが、今回はその最後だからな。この『覚えている最後の人間』は百四十歳なんだ。しかもそれって、『与えられた』十二年は勘定にも入れない年齢なんだつて。父によると、他のお祭りは発明されるだろうから、お祭りがなくなるようなことはないそうな。でもこんなものは二度と実施されないっていうぜ。ある時代の終わりなんだと父は言つてるよ。オレたちみんな、今夜はバンドで演奏するけど、ラッパ吹き十二人に加わるのはトムだけだ。おまえ、真鑑のラッパを吹くわけ？」

「いや、たぶんホラ貝のラッパを吹く。真鑑のラッパなんてそれでも吹ける」

「そしてホラ貝をおまえみたいに演奏できるやつはないもんな」とデューク・チャールズが割り込みました。「トム、おまえのホラ貝音楽なら、オレたちみんなをすっぱり丘を越えて運び去ってくれるぜ。おまえのホラ貝演奏ときたら、答えを引き出さずにはいられ

ないって感じだもんな」

「その通り、確かに」とトム。「そしてときには、丘の彼方からその答えが聞こえるような気がするんだよ。オレの音樂は確かに、答えがあるべき代物なんだ。かつて蝶月貝を持っていたので演奏してみたけど、まるで本物の音樂が出てこなかつた。確かに蝶月貝は音樂博物館の分類だと『人を欺く音樂的でない貝』とされてる。でも、誰かは絶対に演奏できると思うな。オレの音樂への答えを、蝶月貝で演奏できるやつが絶対いるはずなんだ。ひょっとすると、何かどこかにいる人たちにとつては、ホラ貝ラッパのほうが『人を欺く音樂的でない貝』なのかも。いや、オレの言いたいことは言葉では説明できん。でもホラ貝で言いたいことを語つてみせよう、あんたらが聞いて理解さえできればな。たぶん『最後の人』ならわかるはずだよ。昨日会ったんだけど、えらく深遠そうな様子をしてるんだ」

「最後の人は今晚以降は何一つわからなくなるぜ」とコブ・ヨリアスは、肉切り鋸で細やかかつ力強い作業をしつつ申しました。「今晚死ぬんだし、その用意も出来ていると自分で言つてるもんね。ほら、あいつの公式の肩書きは『覚えてる最後の人』なんだから」「何を覚えてる人なんだよ?」と他の若者ほど賢くないトムは尋ねました。

「おやおや、それが何だか他のだれかが覚えてるようなら、その人がそれを覚えてる最

後
はくアキ
ニ

後の人にはならないだろう」とライオン・ブライトフットが理性的に申します。「そしてあの人があやつと死んだら、その古い秘密が何なのか、まるで誰一人知らなくなるんだ。どうせろくでもないことなんだって、みんな言つてるよ。そして父の意見では、説明されたつて今残ってる連中にはだれも理解できないだろうとさ」

この若者四人は、ちょうどこの二年ほど前に、同時に出された要請に基づいて生まれてきたのでした。みんな、どこで見かける若者にもひけを取らないほど立派な若者たちでした。そして実際問題として、男も若者たちも、他のすべてと同じく、どんどん向上し続けておりました。男たちは息子の要請を出すときに、自分が何をしているのかについて十分な理解ができております。いまだかつてないほど科学的に要請を出しておりました。目的を理解し、そして結果を得ていたのでした。

「世界の存在理由は世界を享受するためだ」というのが目下の確固たる倫理科学的な主張でした。「そして男と若者たちの存在意義は、そうした同じ男や若者たちの充実と喜びなのである」

男たちも若者たちも確かに充足し、そして喜びを得ていました。そのことで宇宙全体胸を張り、それにより宇宙をお互いの調和と協調の中に取り込んだのです。

トモアキ
トモアキ

同時に甕出し小屋からやつてきたこの少年四人は、手早くきつい豚肉作業をしておりました（あらゆる仕事の中で最も意義深くトーテム的な仕事です）。そして仕事が終わったら、教程を受けに向かわねばなりません。生涯にわたりこんな具合なのです。朝には仕事。午後には教程。晩にはお楽しみ。知性と友情と芸術と喜びこそは人生の礎であり、そのどれ一つとして軽んじてはなりません。

この若者たちは通常、基礎課程はいっしょに受けており、そして主専攻や副専攻や付録課外科目は同じ専攻を取っている人びとといっしょに受講いたしました。でも専門課程ですら「逆流」はございます。基礎の友人同士の出会いです。そして教程もまたブタ殺しその他と同じくらいめざましく学び取られねばならぬのです。

若者たちは教程の年月に爆発的な勢いを持つてやつてまいります。そして知識と技能と理解の獲得は生涯にわたり爆発的な勢いで続くことになっておりました。完璧なバランス、情熱、そして（そうです）平静は高速でのみ達成されるのです。ちょうど高速で回転するコマが、バランスと確実性と平静さを持っているように。でも速度が落ちるとぐらぐらし

て、時には倒れてしまいます。

少年たちは甕出し小屋（肉体甕と精神甕）にいたときに、力強い肉体的精神的心理的な強度を発達させてはおりましたが、どの領域でもまったく意識されることはありません。みんな概ね無意識のまままで、強力な活動の無糸分裂的な環境が表面の遙か下に保たれている状態になっております。その状態で息子たちの要請に対して出荷が行われます。その状態で、表面上に出てくるべきものは何かという選択が行われ、どものものは無害な休眠状態で永遠に表面下にとどまらせるべきか、どれがまだ表面下にある段階で破壊され、後々問題を引き起こさないようにするべきかが決まるのです。

というわけで、若者たちがその環境の表面を破って出てきたときには、一部の領域について明瞭な記憶を持ち、他の部分についてはボコボコの穴だらけなのです。その記憶の穴には、教程を通じて他の事柄が流し込まれるかもしれません。まったく関係ない内容の事柄です。でも若者たちはみんなその古い表面を実に力強く、まるで跳躍するイルカのように、制御された爆発に乗って飛びロケットのように、バネ仕掛けのカタパルトで発射される叫ぶ石のように破り出でまいったのでした。そしてその若者たちが表面化すると、意識を持つようになり、その全員が「与えられた」十二歳という年齢を持つものとして登録されるのです（無糸分裂環境にいる期間は六週間から六ヶ月まで様々。でも十二年もかかる

ことは絶対にありません)。

トム・ハーフシェルは正午に、主専攻のラッパ演奏や関連科目的教程に向かいました。教程の音楽部分ではホーンがきわめて重要です。すべての若者はこの世に出てくるときには、深海でトリトンの角笛のようなものを演奏した記憶を持たされております。太鼓や銅鑼や鐘や金属叩きもかれらの音楽では重要でしたし、がちや木や歌い木もそうですし、弦楽器や鍵盤楽器さえあります。でも尊い楽器はホーンであり、その従兄弟たる管楽器なのです。

トム・ハーフシェルは正式楽器としては真鍮ラッパを演奏し、非公式楽器としてはホラ貝ラッパを演奏しました。そして上手でした。仲間のだれよりも、真鍮だらうと木管だらうと貝殻だらうと骨だらうとホーンすべてが上手だったし、ブタ歯笛や三文笛、あらゆる楽器の中でも最も高貴なギャアギャアいうブタ腹バグパイプでさえも誰より上手でした。それなのに、トムは「ブタパイプ」とはなじめず、そしてブタパイプのほうもトムになじめません。

教員はトムにこう申しました。「君は他の若者よりずっと上手だな、トム。でも他の子は完全で、君は不完全だ。君の吹き方には何か足りないものがある。君の音楽にはあの違

法のオムハカ要素さえあるかもしだん。君の音楽はいつも、欠けている部分を探し続けて、それに向かって呼びかけている。でも我々が暮らす世界の特性により、そんな欠けた部分などありはしないのだ。それはわかっとるのか?」

「主張としてはわかっていますが、ときには気分としてちがうように感じるのは」トム・ハーフシェル。

「あまりちがうように感じるのは許されておらん」と教員は述べた。「君は専攻をラッパからブタ腹バグパイプに変えたほうがいいと推奨しよう。君の父親はパイプ吹きであつてラッパ吹きじやないし、君についての要請もパイプ吹きをというものだつた」

「いいえ、ぼくはラッパとホラ貝ラッパにとどまらねばならないんです。ぼくの音楽は他のものだとうまく語れないんです」

「君はどうも、果てしないほどの手持ちの曲があるよう見えて」と教員は申します。「君は曲を持っているようで、でも持つておらん。君が演奏するものはすべて、同じ曲の変奏でしかない。その曲を捨てるんだ、トム。確かに上手に演奏はしているが、不完全なんだ。他の曲を演奏しなさい、当初はあまりうまく演奏できないかもしだんが」

「無理です。ぼくが吹けるのはあの曲だけなんです」「だがあれにはオムハカ要素がある」

240

「ぼくはそれがどんな要素が知らないし、先生もそれを教えてくれないのか教えられないのか」

「ああ、君が男に『泣かれない』前はセリウムの魔術を使っていたんだよ。」
と教員は悲しげに申しました。「君は自分の血で血塗られる！」

五字下

一
九
年
一

副專攻の郷愁民間伝承でも、トム・ハーフシェルはやはり困難に直面しており、自分のついてせいぜい体験を続けるのに苦労しておりました。郷愁民間伝承は穴だらけでした。これについてせいぜい言えるのはこの程度です。いろいろ改訂はされました。かつてはブタ神話と太陽神話だけではなかつたのです。月の神話などもあつたかもしれないし、他にもあつたかもしません。でもなぜ今は月の神話がないのか尋ねたら、まちがいなく利点を引き下げられます。避けねばならない分野がかなりあつたのでした。

そして何より面倒なのがこの課程の名前でした。はいはい、これは確かにノスタルジアをきわめて連想させるものです。でも禁止されたノスタルジアの部分があまりに多いので

す。血みどろの記憶で、それについての表現が禁じられているものもあります。何かが根絶やしにされたところの穴埋めに置かれた、馬鹿げた代物や質の低いものもありました。特に、オムハカの地や平原が完全にブロックされていました。それでも多少なりとも巧妙な少年であれば、その土地こそはかつて民間伝承の中心だったことがわかつてしまうような証拠が残されていたのです。

241 その曲しか吹けない

怪獣変身は強力な課程でした。その中心にあるのは男^{アン}ということに収斂します。男自身こそが、あらゆる道や設計が向かう黄金の怪獣だったのです。そして人の原初的な変身はすべて興味深いもので、たとえばトロールやブーガーマン、クマや類人猿やブタ、ライオソ——その通り——と鷺、巨人と悪鬼、サイクロプス、隻眼の海賊など。この最後のものはかなり雄弁で、男たちはかつて持っていた強力な单眼の視点に戻ろうとしているようだつたのです。現代人は、片目（両眼ではなく）が潰れる事故にことさら遭いやすかつたのでした。いまや三人に一人は、潰れた左眼（または邪眼）に黒い眼帯をかけていて、それは栄誉の眼帯なのです。そしてトムが学んだところによれば、ごく最近のできごととして人びとはサイクロプス風または片目の息子たちを要請するようになつてているとか。そしてまさに今シーズンから初めて、実際にその要請通りの息子が得られているのです。单眼の

力はきわめて大きなものなのですよ。

怪物たちの力は人類の中に吸収され、そしてそうした力を得て栄光を感じない男や少年などいるものですか。でもトム・ハーフシェルはそこから抜け落ちている狡猾な怪物に不安を覚えたのでした。強力な怪獣たちに対する相補的な形がなければいけないはずなのですが、それがなかつたのです。黄金の太陽ブタたる男に対する相補的な色や事後的なイメージがあつて然るべきなのです。でもそうちした事後的なイメージを見る力に何か起きてしまつたのでした。

丘の向こうにはオムハカという名の土地がありますが、音楽学、郷愁民間伝承、怪獣変身のどの地図にもそんな土地は載っておりません。だからこそトムは、父親が追加の教程を取るよう助言したときに、主要課外科目としてハード地理学を選んだのでした。トムは、ある特定の場所についてハードな地理学を学びたかったです。

そしてその特定の場所については、ハードっぽい地理学は確かにございましたが、でも本当にハードなものではありません。オムハカというのは一般的な名称でしかなく、そういう地域は一ダースかそこらあるかもしれない（そのそれぞれがかなり大きい）という說さえございます。またオムハカが隆々とそびえ立つ多くの島から成す群島らしいという說もございます。それが毎回同じ（非地理的な）特徴を示すと言うのです。

レアキ

243 その曲しか吹けない

「オムハカ群島にある何かは、ぼくたちが向こうと縁を切ったのと同じくらいびしやりと、向こうからもこちらと縁を切ったんだ」という説もございました。でもこれはハード地理学の説と言えるものでしょうか？ 地理的な情報としては、きわめて不満の多いものです。音楽学にも郷愁民間伝承にも怪獣変身にもハード地理学にも、情報の影のようなものしかございませんでした。化石化した記憶だけ。そしてトムは、自分がその場所に自ら赴くことはできないのを知ったのです。

「それを尋ねた時点ですでにそいつを壊してしまったわけだ」とハード地理学の教員は申しました。「育ちのいい少年ならそれを尋ねるだけの巧妙さはない。いや、そこにいく許可証はいまや誰にも発行されないし、もう何年も発行されていないのだ。それを尋ねるだけで犯罪性の徵となる。

ああトム、若者が男にすらなれない前に切り倒されるのを観るのはいつも嫌なものだなあ。君は自分の血で血塗られる！」

それでも、オムハカ群島については一貫性のある妄想がございました。その一部はトム個人の妄想です、一部は他の少年たち数名の私的な妄想です。こうした妄想は共通の要素を持ち、そうした要素はどこからか伝えられてきたものなのです。それに、凧網の残骸が

見つかっています（これは空中に長いこと漂うこともあります）。そしてときどき捕まる動物の中には、あの古い三点式の傷痕が残っているものがいるのです。まるでだれかが三つ叉の矛で殺そうとして失敗したかのようです。

こうしたものをまとめるとき、記録のある妄想が出来そうなほどです。
この群島の連中は、月カタツムリーテムの生き物なのでした。遠くからは人のように見えます。でも近くで見ると——まあ、人ではありません。まちがいなく男ではありません。

夜に狩りをする生き物です。網を使う人びとです。鳥用の網（ときどきかけらが見つかる厭網）や、狩猟網、漁網を使って、羽のある、足のある、ヒレのある獲物を捕まえます。そして網で捕らえた獲物を殺すのには、三つ叉の矛か短刀を使います。

また狩猟網と漁網の間くらいの、軽快な網を使って、湿った草からトーテムである月カタツムリをすくい取ります。そして鳥網と狩猟網の間くらいの、これまた軽快な網を持ち、それを使って困惑した牝鹿が立ったまま頭をもたげているのをつかまえ、儀式的な三つ叉の矛が持ち出されるはるか以前に、そこからぶら下がり走る罠輪が垂れ下がりループを描いたもので絞めることで息の根を止められます。

群島の人びとは月明かりで狩りをして、月カタツムリのラッパで相互に合図するのでし

た。

(イ) はツメ

ハ

ときにはトム・ハーフシェルはこうしたことを考えつつ夜中遅くに起き出して、高等お

祭り草原に出かけ、力強くホラ貝ラッパを吹き鳴らすのでした。吹いては、答えがないか聞き耳を立てます。吹いては、また聞いてみます。でも答える音楽の呼びかけ（トムはそれが演奏不可能な蝶月貝の貝殻ラッパからくるという妄想を抱いておりました）は、丘の向こうの内陸の島々からは決してやってこないのでした。

そしてトムにとつてはあらゆる夜の最後の一夜に、本当に答えが一瞬だけ、たつた七音という短い間だけやつてきたのでした。でもそれがやつてきたのは、トムにとつてはほんのちょっとだけ手遅れになつてからのことだったのでした。

エタキ

245 その曲しか吹けない

4

それは「覚えている最後の人」祭りの夜のことでした。トム・ハーフシェルは、そのお

祭りの高等ラッパ少年十二人の一人に選ばれました。実は、トムはそんなに上手ではありませんでした。その教程の教室にいる仲間たちだけを見ればだれよりも上手でしたが、このお祭りに向けた十二人の高等ラッパ少年たちは、何百という教程から選ばれた子たちです。トムがこれほど高い栄誉に選ばれたことには、何か裏の理由があるのかもしれません。その最後の晩には、トムのまわりにいろいろ謎めいた発言が飛び交っていたのでした。

トムの父親でさえ、教員たち数名が述べたのと同じ、堅苦しい言葉を述べるのでした。

「おまえは自分の血で血塗られる!」

「ぼくの血はぼくの体内にあって、その後にぼくに塗られるようにしてほしいな。ぼくの血は今夜、体内で歌っているんだ」とトムは楽しげに申します。

「その曲しか吹けない、その曲を血が歌っているのか?」と父親は尋ねました。

「ええ、確かにそれを歌っていますし、それに追加のラッパもいくつかあるかも。お父さん、そこで記入しているのは息子の要請状ですね。それと同封しているのは、お父さんの肉と血のクローン製剤ですね。それはお父さん、合法なことはありませんよ。お父さんにはすでに、このぼくという息子がいるんですから」

トムの父親はこう答みました。「合法になるんだよ。日付は明日にしてあるし、夜中を過ぎるまでは投函しないんだから」

一
メ
ア
キ
▽

「覚えている最後の人」はわめきたて、騒ぎ立てる小怪獣のような存在でございました。百四十歳で、これは「与えられた」十二年は含まれておりません。

「へッヘッヘ。ワシはそんなの『与えらえ』なかつたぜ」とかれは、百万人の男と少年たちの観客に向かってわめいた。「それ以前に生まれたからな。それ以前に生まれた。ワシはそれ以前からやってきた唯一の生き残りだ」

男や少年たちが百万人はいたでしょうか。この人びとは毎週のようにお祭りをでっちあげては、そこに集まるのが好きなのでした。低地の都市とその向こうの丘の間には、三十九カタールのお祭り広場がございました。人びとはフットボールの試合をハーフタイムまで見物しました。そしてその後、楽隊が音楽を演奏し、演説があり、そして覚えている最後の人からちょっとした発言が流されたのです。

「へッヘッヘ、あいつらはガミガミギャアギャア。ガミガミ屋だのギャアギャア屋だの手に、どうしろってんじやよ。始末するしかないじやろが」そして何やら高位の役人が手短に群衆に語りかけます。「われわれの世界は、生きるための世界であります。完全な世界です。それがわれわれの好みなのです」

それからブタ突きトーナメントの地方選準決勝があり、最高のラバ騎手や槍の名手たち

（次）
はなし

が参加いたしました。行進楽隊が三百もありましたが、週ごとのお祭りではそれよりたくさん出てくることも多いのです。演説者が三十人、ウィットと主張を詰め込んで、一人三十秒限定の話をいたします。それからフットボールの後半戦です。

こうしたすべてが慎重にバランスと間合いを取られて配置されておりました。そして何度も何度も、「最後の人」にカットバックしてその発言が流れます。

「ヘッヘッヘ」と覚えてる最後の人はへらへら笑いました。「あいつらはワシたちとは一緒にやつてけないと思いよったんじやな。目に物見せてやつたぜ。『いても地獄、いくても地獄』という格言があつたもんじやよ。だがその後にもっと立派な格言がきたんじや。『いなくて地獄なんてデタラメだ!』

「この『覚えている最後の人』は間もなくこの世を後にする旅に出ます」と高官が発表いたしました。「その付き添いには少年と、その少年のペットのブタが同行いたします」選抜された十二人のホーン少年たちは、実に強烈なラップ力で吹き鳴らしましたもので、会衆のあちらでもこちらでも向こうでも、耳が破れてアゴに血が流れ落ちております。少年たちは見事に吹奏いたしました。でもその一人は、高等ラップ術を理解する者たちが言いふらしていたことはありますか、不完全に吹いておりました。この不完全なラップ手は殺されねばならない、と噂は申しておりました。でも若者が男にすらなれない時期に切

り倒されるのを観るのはいつも嫌なものでございます。

ヘビーウェイト拳闘の決勝戦もございまして、実際に見事な試合で、それが第四ラウンドでのノックアウトで終わりました。

「ヘッヘッヘ、あいつらはいつも、値打ち以上のトラブルばかり起こしてやがったぜ」と覚えてる最後の人は会衆たちにわめいておりました。「まあ連中をあきらめたときに、確かにワシらは何かをあきらめはしたがな、ヘッヘッヘ、でもそれが何だったか覚えるのはワシだけだから、他のあんたらはどうでもいいことじや」

別の高官が発表いたしました。「まだ不完全で不満を持つ者が数名おります。百万人に一人くらいそういうのがおります。自分に何か欠けていると考えております。中にはその欠けた要素が丘の反対側にうろうろしているとさえ信じております。でも正気でバランスの取れたわれわれはみんな、丘の向こうになど価値あるものは何もなく、何も失ってなどいないのを知っております。われわれがすでに持っていないようなどんなものがそこにありますと言ふのでしょうか?」

十二人の大音量ラッパがまた鳴り響きましたが、そこでその中の一つが圧倒しました。それが地位を得たのは、音量のせいでもなければ技量のためでもありません。一時的に位となつたのは、その曲が巧妙だったからです。その曲にはショッキングな喜びがござい

ましたが、その晩余分なボーナスの血が流されるという知識のほうにそれ以上の喜びがあつたのです。

「ヘイヘイ、オムハカの谷にはまだ連中が何人か残っているっていうぜ。ワシは絶対に信じなかつたがな」と覚えてる最後の人がわめきました。

そしていまやアクションの勢いが増してクライマックスに移ります。ラッパ十二本が一斉に吹き鳴らされます。そしてそのうち十一本の音が消え、一本だけが奇妙な曲を吹き続けて、まるで答えを要求するか、少なくとも対位旋律を求めてるかのようでした。「あの子はあの曲しか吹けないんだ」と特別なラッパ知識を持つた人びとはまわりの人へ告げました。そして孤独なラッパ吹きは、ホラ貝ラッパを持って、まだ熱演を続けながらアリーナの中心にまでやってまいりました。そのペットのブタが足下におりまして、そして精銳の騎手と槍の名手たちもまた、その中心にやってまいりました。そこは実は狩り場なのです。

覚えてる最後の人は、発言が一言も聞き漏らされないように拡声器につながれていますが、これまた同じ中心部につれて来られました。

最後の人はへらへら笑っています。「ヘッヘッヘ、連中は始末してやつたぜ。いい厄介払いだ。あいつらおかげで世界はずつと大混乱じやつたからな。でもなんでこのラッ

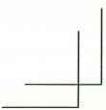
パ少年があいつらのことを知つとるんじや? まあどうでもいいんじやがな。この子もワシといっしょに行くんじやから」

ラッパ少年トム・ハーフシェルもまだ演奏を続けております。ブタ槍の名手たちはラバの鞍にまたがつて殺しを行い、三匹の生き物をあの世送りにする準備を整えております。最後の人はわめきました。「ヘッヘッヘ、奴らは忘れられたほうがマシじやよ。あれも楽しみの一種ではあったが、連中がこの世にいては得られない楽しみが実にたくさんあつたでな。だってやつらがまわりにいると、ブタ殺し大会すら開けないんだから」

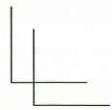
その時、槍の名手たちが最後の老人を倒しました。老人は倒れ、地面の上で死んでしまった。ラッパ吹きのトムは、再び強力かつ困惑する音楽を吹き鳴らしました。槍の名手がペットのブタを殺しました。実に手強い小さな的です。小さなブタは、死んだ最後の人の頭のところで地面に横たわっております。

トムは強力な曲の半分を吹き鳴らしました。が、それが槍によって突然中断させられ、そしてトムは死んだ最後の人の足下で地面に置かれました。

これがブタと若者と男と、そして彼らが知つていたかもしないあらゆる秘密の終わりでござります。



253 その曲しか吹けない



252

でもそこでトム・ハーフシェルの音楽に対する答が届いたのです。彼方から、でも明瞭に力強く、演奏不能なはずの蝶月貝のラッパ貝で演奏されて。
これは本当にトムの音楽に対する答えではありました。それも説得力ある答えで、百万人の男や若者たちに衝撃を与えました——その七音が聞こえている間は——しかしするど——それは突然中断させられてしまつたのです——殺人槍によって。

槍攻撃はごまかしようがありません。

そして反動行動は避けようがありません。反動行動とは丘の向こう側の行動により事前に想定されていたものです。ちょうど物質が反物質を事前に想定していたように。「丘の向こうのはるか彼方」（オムハカ）地域にいる反生物たち（あいつらは、この世界平面にまだ暮らしていた頃には何と呼ばれていましたっけ？——そう、「女」でした）、あの連中は自分たちの一人でも直観的で喚起的になるのを許すわけにはまいりませんでした。それは丘のこちら側の男たちとて同じこと。だまつて素早く殺すのが（槍はなんともこれにおあつらえむき！）場合によっては唯一可能な対応で、たつた七音で大混乱を引き起こそうとするラッパの呼びかけの場合なら特にそういうなのです。

秘密を抑圧するなら、反秘密も抑圧しませんとね。

